

横浜市 歴史博物館 NEWS 16 2003・3

- ◇ いんたびゅー 河合正朝
「日本の美術は一つで完結しない。
重ね合わせ組み合わせることで美をつくるのが魅力」
- ◇ 特別展「古代日本 文字のある風景」
企画展「古代を考えるⅢ 文字との出会い」によせて
- ◇ <研究余話> 絵馬と墓目行事
- ◇ 収集・収蔵資料の紹介[17] 小丸遺跡出土の縄文土器
- ◇ <常設展示室探検> 都筑郡衙想定復元模型
- ◇ <博物館ウラバナシ> 写真室
- ◇ ちょいとミュージアムショップたいむ
- ◇ <知ってますか?> 三か国語常設展示パンフレット



河合正朝

(かわい・まさとも)

慶應義塾大学教授・横浜市文化財保護審議会委員

日本の美術は一つで完結しない。
重ね合わせ組み合わせること
美をつくるのが魅力。



◎日本美術の魅力聞かせてください。
中国やヨーロッパの美術は、ある一つ
のものでその美が完結しています。これ
は絶対的に美しいとか、崇高であるとか、
あるいは一つの画面の中にすべての美し
さが凝縮されている、というような芸術
を目指して作られています。ところが日
本の美術は一つのものでは不完結で、別
のものとの組み合わせないしは結び付き
によって一つの完結性を求めている。い
わば洋服のアンサンブルやコーディネート
のようなもので、一つだけでは物足り
ないけれど、別の、もう一つと合わせる
と新しい美が生まれたり、それがさらに
充実する。「この季節にはこの絵を床の
間に掛けましょう」とか言うでしょう。
その絵だけで完結するのなら季節の変化
といったものは関係ないわけです。その
絵を掛けることで、季節も合わせて鑑賞
する、ということもできます。また、西
洋ではどこかに絵を掛けたら、その前に
花を置く、といったことはしないもので
す。ところが日本では床の間に絵を掛け
るとその前に花を置き香炉を据えて、
「これで一つにまとまった」などと言っ
たりする。そういうふうに加えたり、重

ね合わせることで美がつくられるところ
が日本美術の魅力でしょう。

関東の美意識のもとに

◎二月の特別講演会で、「東国の水墨画」
と題し、中国から入って、まず関東で根
付いた水墨画の発展などについて話され
ましたが、東国の水墨画の特色は。
日本の文化は普通、西から東へ、関西
から関東へと伝えられました。水墨画
は逆のコースをたどりまして。十三世紀
後半から関東の上層武家のもとで発展
し、室町時代になり、その担い手が関西
へ移ったことから、京都に中心が移りま
した。けれどもその後、関東の水墨画に
はこの地方の特色がはつきり現れていま
す。京都の水墨画とは、様式などの点で
はつきりした違いがあるのです。関東に
はこの地方独特の美意識があり、それを
もとにつくり上げられたものといえます。

◎横浜で江戸時代、「禅画」とよばれる
水墨画が発展したそうですが。
禅画は、同じ僧侶が描いた絵でも、文
芸的内容を含み、上層武家の教養として
愛好された室町時代の絵とは異なり、禅
の布教を目的として、達磨や観音や時に

は一富士二鷹三茄子とか丸や三角や四角
の図形などを比喩的に、大衆向けに分か
りやすく描いたものです。禅画を積極的
に展開したのは静岡生まれの白隠という
僧で、彼と並び称される人物が、横浜・
永田（南区）の宝林寺・東輝庵の月船禅
慧のもとで修行した仙崖です。仙崖は後
に九州・博多の聖福寺に移ったので、九
州の画家として有名ですが、宝林寺では
仙崖のほかに物先海旭や誠拙周楞など禅
画を描いた僧が何人かいます。禅画は横
浜が発信地ではありませんが、ここに禅
画の拠点があつたのは確かです。

守るには活用が大切

◎今年は横浜市文化財保護条例制定一五
周年にあたりますが、文化財保護につい
ての意見を聞かせてください。
中国でもギリシア・ローマ文化の地域
でも、ある文化が栄え、その時代が終わ
って次の時代が来ると、前の時代の文化
や美術は捨てられてなくなる、つまり
人々の手から離れてしまいました。した
がって現在伝えられている文化財の多く
は、地中に埋蔵されていたために残り、
発掘で出てきたものです。ところが日本
の場合、法隆寺や正倉院が好例で、七世
紀にできたものは七世紀にできたまま、
人が守り伝え続けてきました。

そうやって文化財保護を意識的・無意
識的にしてきた日本人は、世界でも珍し
い民族でしょう。現在の文化財保護法で
は、文化財を保存し伝えると同時に活用
しなければいけない、といっています。
不必要になれば捨てられてしまいますか

ら。日本では茶の湯などで活用したこと
が、古い美術品が残った理由の一つでし
ょう。今は開発のため古い建物などが壊
されています。さすがに奈良や平安時代
のものは壊そうとしないけれど、五〇年
や百年以内のものは、それほど古くない
と思われて壊される。でも三百年たつた
ら貴重になるのですから、やはり、使い
ながら守っていくことが大切です。

大人が子どもと一緒に

◎当館への期待は

博物館の周りは開館当初と比べ、マン
ションが建ち並び、人口が急増していま
すから、そういう人たちに来てもらえる
ように、工夫すべきでしょう。博物館は
みんなが活用しないと、生きたものにな
らないのですから。最近、各地の美術館
や博物館で、子どもにも興味をもたれるよ
うな活動に力を入れるところが多いので
すが、子どもが博物館などに親しむよう
にするには、まず大人の利用を促さな
いとダメです。僕が美術を好きになつた理
由は、両親や祖父母が美術の愛好家で、
親たちが見るものを一緒に見て、面白い
と思ったからです。ですから教師などの
大人が、子どもとともに館内を回り、ど
のように見たり考えたりするのか、身を
もって示してほしいものです。

▽かわい・まさともプロフィール

●一九四一年、東京都生まれ。慶應義塾大学大学院
博士課程修了。日本中世・近世絵画史専攻。同大学
助手、同助教授を経て現在に至る。十四世紀から十
七世紀にかけての水墨画を中心に様式論の立場から
日本絵画史の流れを研究している。

●著書「日本美術絵画全集 友松／等類」（集英社）
「日本水墨名品図譜」「禅林画賛」（毎日新聞社）など。

特別展

古代日本 文字のある風景

金印から正倉院文書まで

企画展

古代を考えるⅢ 文字との出会い によせて

南武蔵・相模の地域社会と文字

文字をもたなかった日本列島の人々は、

約二〇〇〇年前の弥生時代の中頃、中国と

の外交を主な契機として中国の文字―漢字

を受け入れました。古墳時代の中頃の五世

紀になると、埼玉県の稲荷山古墳出土鉄剣

銘、熊本県の江田船山古墳出土大刀銘にみ

られるように、ヤマト王権の展開にともな

い、文字は政治の道具として盛んに使われ

るようになります。八世紀、律令という法

に基づいた国家の制度が整備されると、戸

籍をはじめとする各種の行政文書、税の提

出など、文字は支配のための不可欠の道具

となりました。また、文字は仏教や祭祀な

どをとおしてムラの人々へも受け入れられ

ていくようになります。古代の人々には、

文字そのものが権威を示すとともに呪力を

持つものとして扱われていたのです。

横浜市歴史博物館では、四月初めから七

月初めにかけて、「古代の文字」に焦点を当

てた特別展と企画展を連続して開催します。

まず、特別展「古代日本 文字のある風

景―金印から正倉院文

書まで」を四月五日

(土) から五月一日

(日) まで開きます。

特別展では、重要文化

財の貨泉・「山辺郡印」

をはじめ、銘をもつ銅

鏡や石碑、全国各地か

ら出土する木簡・

漆紙文書や墨書土器、

さらには東大寺写経所

で使用された各種の帳

簿や中央官庁の公文書

から構成される正倉院

文書などをおして、

列島の人々が文字を受

け入れ、それをどのよ

うに使用していったの

か、日本の古代社会と文字とのかかわりを

描きます。

ここでは、石川県の加茂遺跡で発見され



墨書土器(都筑区古梅谷遺跡出土)



勝示札の伝達風景の復元

た勝示札(お触れ書き)

の伝達風景の復元はみど

ころのひとつです。この

勝示札は、「早く起きて

働くように」、「お酒など

は飲み過ぎないように」

など農民の生活を規制す

る命令ですが、これが

人々にどのように伝えら

れたのか、その様子を実

物大で再現します。また、

膨大な数の經典を組織的

に書き写す仕事に従事し

た写経生の仕事の様子や

生活を復元したイラスト

によって、正倉院に残さ

れた文書の世界がどのよ

うなものであるかをわか

りやすく紹介します。

古代の人々が出会った

多様な「文字の世界」を

みていただきたいと考え

ています。

引き続き、五月二四

日(土) から七月六日

(日) まで企画展「古代

を考えるⅢ 文字との出

会い―南武蔵・相模の地

域社会と文字」を開催

します。

近年の発掘調査によって、横浜・神

奈川県下でも墨書土器や興味深い内容をも

つ木簡が発見されています。これらの出土

した文字資料によって、古代国家の地方行

政システムや地域社会の具体的な様相が明

らかになりつつあります。この企画展では、

南武蔵を中心に相模国地域をふくめ、古代

の地域社会やムラにおいて、人々が文字を

どのように受け入れたのか、文字はムラの

中でどのような機能をもつて使用されてい

たのかを探ります。また、古代国家の文書

行政による地方支配と地域社会・ムラとの

関係にも迫ります。ここでは、横浜・神

奈川県下で出土した墨書土器・木簡を中心

に、瓦塔、火葬蔵骨器、祭祀関係資料など

多様な資料を交えて展開しますが、先の特

別展の地域版としての意味合いももってい

ます。また、この企画展は川崎市市民ミュ

ージアム(「古代を考えるⅠ 郡の役所と

寺院」会期・四月一九日(土) 六月一五

日(日))、府中市郷土の森博物館(「古代

を考えるⅡ 武蔵の国府と国分寺」会期・

四月二六日(土) 六月二三日(日))と

連携した企画でもあります。三館が相互に

役割分担をして、古代の国府・郡家・寺

院・ムラの問題をとりあげ、古代の地域社

会の様相を明らかにしていくことも目指し

ています。

横浜市歴史博物館の特別展・企画展、さ

らには関連する他の二館の展覧会をご覧い

ただき、日本の古代において文字の果たし

た役割、武蔵・相模の地域社会の姿への理

解を深めていただければと思います。

(平野卓治)

絵馬と墓目行事

ひきめ

今年は十二支の未年である。

新年を迎え、社寺、特に神社では、境内の一角で妖魔を降伏させるという錆矢や破魔矢に絵馬をくくり付けた縁起物、あるいは絵馬そのもの、各種守り札などを準備し、参詣者の信心に込めている。

*

横浜市歴史博物館は平成六年（一九九四）一月六日に誕生した新しい区、都筑区中川中央に所在する。現在は港北ニータウンの中心として商業ビルが並ぶこの地は、江戸時代の所在地であると武蔵国都筑郡大柵村にあたる。開発にあたり、昭和四〇年代後半から五〇年代にかけて、この界隈の民俗調査を行ったことがある。山と谷の連綿と続く農村地帯で、コヤシベヤ（堆肥小屋）などをのぞくと、柱などに打ち付けられた小絵馬を見かけたものであった。その絵馬についてであ

るが、この近在でも、かつては盛んに奉納された社寺があった。一つは大山街道の宿場であった青葉区荏田に所在する真福寺であり、一つは中原街道沿いに位置する都筑区南山田の山田神社である。ともに絵馬堂は存在しない。

*

前者の真福寺は、本寺が廃寺となり、大正十一年（一九二二）に小字原根に所在した観音堂を改名した寺で、絵馬は本来の観音信仰のもとで奉納されてきた。観音堂は、棟札から寛政元年（一七八九）の建立とされているが、享保年間（一七一六〜一七三六）に成立したとされる小机領三十三か所子年の観音霊場の第二〇番所に位置づけられ、さらに明和七年（一七七〇）銘の扁額「圓通閣」が所在することから、当観音堂には前身の建物が存在したと推察されている。ちなみに「圓通」

とは圓通大士、つまり観世音菩薩の異称で、圓通閣は観音堂を意味している。

何度となく、真福寺には調査でご迷惑をおかけしてきたが、平成九年（一九九七）に、絵馬をはじめとする奉納額の総合調査を実施した。その結果、大絵馬から小絵馬まで一七九点の絵馬が、堂内外に奉納されていたことを知ることができた。それらのうち、とくに小絵馬に描かれた絵は庶民の素朴な祈願の内容を示しているもので占められ、馬の絵以外では、観音信仰に伴う「拝み絵」、眼病の平癒を願う「向かいめ」や「鷹」の絵、乳の出を願う「乳しぼり」などであった。小絵馬は荏田の小字宿にあった雑貨店で販売されていたというが、現在では商売ではない。

山田神社は、江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』には記載がない。明治四三年（一九一〇）、かつての妙見社に、北山田の神明社、東山田の諏訪社、そのほか十三社を合祀し、山田神社と改名したからである。ここに奉納された絵馬の枚数は、昭和六一年（一九八六）の調査で一八八枚を数えている。その大

半は小絵馬に属し、しかもそのうちの七割近くに於たる一二七枚が亀の絵柄であった。これは妙見社の御神体由来する信仰で、御神体は亀の甲羅に乗って来られたからだときれ、ムラでは決して亀をいじめてはならないと伝えられてきた。さらに亀の絵馬の奉納はシモの病や眼病の平癒に結びつくと思われ、絵馬以外に亀そのものを奉納した話もきかれた。亀の絵馬は参道入り口前の農家で作られていたとされているが、その製作は断って久しい。

*

この亀の絵柄をもつ絵馬のように、特異な絵柄をもつ絵馬が市内の神社で見られる。

磯子区岡村の岡村天満宮では、学問の神とされる菅原道真の絵馬が準備されている。進学を願う絵馬の代表格である。絵馬は「願いごと」と「願ほどき」用が組み合わされている。

港北区師岡の熊野神社では諸願成就を願う三本足の八咫鳥の絵馬が準備されている。この鳥は、神話中の鳥で、神武天皇の東征のとき、熊野から大和へぬける

師岡熊野神社
の八咫鳥絵馬



山田神社の亀絵馬（昭和初期）



真福寺の拝み絵馬（明治期）



岡村天満宮の天神絵馬



鶴見神社の墓目行事と
早乙女の絵馬

山中の道案内役として、天照大神のお告げによって飛来したという。この依代を熊野神社は崇め、社の紋とし、その絵柄の絵馬を作っている。昨年、日本と韓国でサッカーのワールドカップが共同開催されたが、日本チームのユニホームには、伝統ある八咫鳥のワッペンが輝いていた。熊野神社ではこの由来を踏まえ、許可の下で同じ絵柄の絵馬と守り札を準備し、日本チームの決勝戦進出を願った。これは報道機関にも取り上げられ話題となったことは周知のところである。

鶴見区鶴見の鶴見神社（旧杉山神社）では、昭和六二年（一九八七）四月に一六六六（一六六六）年に「田祭り」が再興した。それを記念し墓目行事と早乙女を描いた絵馬が作られた。この田祭りは『新編武蔵風土記稿』鶴見村の項に「杉山明神牛頭天王相殿・・・昔ヨリ此社ニテ毎年正月十六日ノ夕方百姓等カウタヒヲトル明神ノ田祭ウタト云モノアリ・・・」とみえ、伝統をもつ行事であったことが知られる。絵馬に描かれた墓目の神事は、年の初めに鬼門に向かつて墓目の矢、つまり射ると高い音を響かせて飛ぶ鎗矢の一種を放ち、この音によって悪魔を払う儀式である。

文頭でふれた新年の鎗矢や破魔矢は、この墓目の神事などの矢に由来する。

*

このように、地域の絵馬を眺めていて、ふと頭をよぎるものがある。それは岡本綺堂の筆になる半七という岡っ引きのス

「パー스타」である。江戸並びに開港で沸く横浜などを舞台に繰り広げられる捕り物と、そこに描かれた江戸庶民の風俗の描写に魅せられたものである。その物語の一つに「正雪の絵馬」というのがある。大筋は、絵馬蒐集狂となった四谷の大木戸ぎわで酒屋を構える多左衛門が、大宮八幡に奉納されている由井正雪の伝承をもつ絵馬を手に入れ、定例の「絵馬の会」で披露する。だがその絵馬は、四谷塩町の絵馬屋大津屋重兵衛が女絵かき弧芳に模写させ複製した偽物で、それを多左衛門につかませたのであった。そこに事件が発生し、半七が登場する。彼は推理し、手下である松吉・亀吉・幸次郎を使って裏を固めながら、解決の糸を手繰り寄せていく。

博物館の仕事も、時と場所にかかわらず、いろいろの事象に出くわし、調査に取り掛かる場合が多い。資料の真贋に関しては神経を使うところであり、また調査データの分析に当たっては、縦軸と横軸の係わりを求め、結論を導き出す訳であるが、その方法は半七の世界と相通ずる点が多々あるようである。

参考文献

- 港北ニュータウン郷土誌編纂委員会「都筑の民俗」平成元年（一九八九）
- 横浜市教育委員会「横浜市文化財調査報告書 真福寺絵馬調査報告書」平成九年度調査
- 鶴見田祭り保存会「郷土芸能 鶴見の田祭り」昭和六三年（一九八八）
- 岡本綺堂「正雪の絵馬」「半七捕物帳（四）」昭和五二年（一九七七）

（岸上興一郎）

小丸遺跡出土の縄文土器

博物館では去る二〇〇二年の七月から九月にかけて企画展「たのしい考古学」を開催しました。ここに紹介する小丸遺跡の土器は、横浜地域の縄文時代後期の資料として同展で展示したものです。

縄文時代後期は今から四〇〇〇年前から三〇〇〇年前頃までの時期とされ、市域には多くの遺跡が残されています。金沢区の称名寺貝塚や神奈川区の三ツ沢貝塚など海浜部に所在する遺跡が古くから知られて

いましたが、都筑区の港北ニュータウン地域でも川和向原遺跡や原出口遺跡、古梅谷遺跡、華蔵台遺跡などの調査が行われ、内陸部における当時の暮らしの様子も次第に明らかになってきました。

小丸遺跡の縄文土器（後期 左奥の深鉢形土器高24.5cm）

小丸遺跡は都筑区大丸にあった遺跡で、現在の「大丸からたち公園」付近にその中心がありました。後期の竪穴住居跡五〇軒あまり、掘立柱建物跡、土器捨て場などがみつかっています。そのほかに縄文時代早期から中期にかけての資料もみられます。後期の集落は中央部に広場をもちその外側をめぐるように建物建てられており、縄文時代に広く存在する環状集落とみられます。一帯の中期の大型集落遺跡に比べると小ぶりですが、この地域に点在する他の遺跡とともに「荏田遺跡群」と呼

ばれ、同一地域に広がる遺跡相互の関係を解明する努力が続けられています。

小丸遺跡から出土した後期の土器は年代順に称名寺式土器、堀之内式土器、加曽利B式土器と呼ばれるもので、後期の初頭から中葉にかけてのもので、器の形は各種あり、写真の中央手前は浅鉢形土器（堀之内2式）、その左二点は鉢形土器（どちらか加曽利B1式）、後列の三点は深鉢形土器（左二点は堀之内1式、右端は加曽利B1式）、右側手前の二点は注口土器（奥寄りの大きいものが堀之内1式、手前が加曽利B1式）です。後期の土器は中期のものに比べて大胆な装飾は影をひそめますが、繊細で丁寧な文様を施すものが多くなります。また注口土器が発達し器の種類も増えてゆくなど、前代とは異なった特徴がみられます。これは、縄文時代後期の社会が複雑化すると同時に洗練されていったことを示しているともいえるでしょう。

その後、東日本では東北地方を中心として亀ヶ岡式土器が成立し、晩期の文化が開きます。しかし、横浜地域の縄文時代の集落は次第に減少してゆき、晩期にはほとんど遺跡が残さなくなります。小丸遺跡の縄文土器は、こうした縄文時代の転換期の姿を物語る資料でもあるのです。

（小倉淳二）

常設展示室探検

都筑郡衙想定復元模型

古代の律令国家では、全国は現在の県に相当する国に分けられ、国はいくつかの郡で構成されました。国には国府、郡には郡衙（郡家）という役所が置かれ、とくに後者が地域支配の拠点となりました。

横浜地域の西北部は武蔵国都筑郡に該当し、その役所の遺跡が青葉区荏田西で発見された長者原遺跡です。この遺跡は、二つの丘陵上に郡庁（中枢部）・厨（給食施設）・館・



正倉（保管施設）という郡衙に必要な施設が巧みに配置され、役所全体の構成が理解できる貴重な事例です。模型では発掘成果をもとに、八世紀はじめの役所全体の姿を大胆に復元しました。小さいながらも役所で働く役人の姿、税を運ぶ人々の様子も作り込んであります。また模型の前面のモニターでは、コンピュータ・グラフィックによって、遺跡から建物を復元する過程を立体的にみることが出来ます。どのようにして建物が復元されたのかを確認してみてください。



写真室

博物館では、資料の収集や保存、調査や研究、また展示や普及啓発などの仕事をしています。これらの仕事に写真は欠かせないことはできません。展示の解説をする図録



浮世絵の撮影。照明は反射させたり拡散させたりして、やわらかい光にします。



双六の撮影。カメラは、カメラスタンドで簡単に上下に動かすことができます。

や展示パネルを作製する時、調査や研究をしたりその成果を発表する時、新しく資料を収集したり登録する時、また催し物の案内やお知らせをするポスターやチラシを作製する時、この他にも数多くの写真を使います。そのため博物館の中には、必要な時いつでも写真撮影ができるように撮影のための写真室があり、撮影機材も備えられています。

写真室は博物館の一階にあり、撮影用の照明以外の光の影響を受けないように窓もなく、また照明器具をセットしたり、余計な反射を防ぐために天井も高い構造になっています。

この写真室で撮影される資料は、土器や石器、古文書、浮世絵、民具、農具と様々な分野に及んでいます。大きさも一センチに満たない装身具から、三メートルを越える屏風など様々です。撮影でいちばん気を使うのは資料を傷めない事です。中には、底の丸い土器や、折り目の付いた古文書など、ただ置いただけでは撮影できない資料もあります。底の丸い土器や尖った土器を撮影する時は、土器の後ろに支えを置いて倒れないようにしますが、支えが大きすぎると前から見えたり、余計な影が出たり、逆に小さいと不安定になったり、とても神経を使います。折り目や皺の付いた古文書や絵図などは、写真に写らない端の部分にガラス棒の重しを置いて皺を伸ばしたり、反射しないガラスで隙間がないように押さえて折り目や皺を伸ばします。また民具や農

具などは、使われた状態を再現して撮影するために、天井や壁から釣り糸で引っ張って安定させるような時もあります。このように実際の撮影では、写真に写らない部分で様々な工夫がされていて、その準備に多くの時間と神経を使っています。

撮影に使う機材の中には、普段あまり目にするようなものもあります。

カメラは、中判カメラの6×7センチ判や大判カメラの4×5インチ判というカメラを使います。これらのカメラの第一の特徴は画面の大きいです。6×7センチ判で、三ミリ判の約四・五倍、4×5インチ判はさらに大きく、三ミリ判の約一・三倍になります。画面サイズが大きくなればそれだけ記録できる情報量が増え、印刷物やプリントでも高画質、高階調になり、資料の細部まで再現できるようになります。他にも、大型のストロボ、カメラスタンド、調光機など、より良い写真を撮手早く撮影するのに役立つような機材がいくつも使われています。

また、写真室の中には暗室があり、撮影したモノクロフィルムは、すぐ現像したり、プリントを焼き付けたりすることもできます。

写真撮影のためとはいえ、資料を移動したり、照明を当てたりするのは、損傷や劣化を招く原因にもなりかねません。撮影では資料の安全を第一に考えながら、少しでも多くの情報を伝えられるような写真を撮影することを心掛けて作業が行われています。

(吉川久雄)

ちよいと

ミュージアムショップたいむ
Museum Shop Time

手拭いはんかち

去年秋の特別展「屋根裏の博物館」はご覧になりましたか？ 渋沢敬三さんって、すごくバワフルな人でしたね。敬三さん達が苦勞を重ねて集めたさまざまなモノは、これから生きる私達のすばらしい財産になることでしょう。(ご覧にならない方は、読みこたえのある図録が出ていますので、ぜひそちらをご覧ください。)

博物館では特別展にあわせてオリジナルのハンカチを作りました。手拭いの生地で作ったので、名付けて「手拭いはんかち」です。敬三さんのぼう大なコレクションから、イチオシを選んでデザインしました。あなたのハンカチコレクションの中にぜひ加えてください。一階ミュージアムショップで好評発売中です。



左から、福助・だるま・豆鹿
一枚 600円(税別)

今後の企画展のお知らせ

- 特別展「古代日本 文字のある風景—金印から正倉院文書まで—」
4月5日(土)～5月11日(日)
- 企画展「古代を考えるⅢ 文字との出会い—南武蔵・相模の地域社会と文字—」 5月24日(土)～7月6日(日)
- 収蔵資料展「ペリー来航150周年記念 ペリー来航と東京湾」
PART 1 ペリー来航と横浜(仮題) 7月19日(土)～8月17日(日)
PART 2 東京湾の村々(仮題) 8月23日(土)～9月23日(火)

表紙写真は

現在のJR京浜東北線と大岡川・中村川に囲まれた釣鐘状の地域は、350年程前までは入り海で、ここを埋め立てて出来たのが吉田新田です。この開発工事は、堤防を海中に作ることから始まったと考えられ、この模型は堤防造成の様子を想定復元したものです。

??????? 知ってますか ???????

三か国語常設展示パンフレット

横浜での決勝戦で幕を閉じた2002年日韓共同開催のFIFAワールドカップ。この時期、横浜には普段より多くの外国人の人たちが集まりました。博物館でも記念事業として展覧会「ようこそ、歴史の横浜へ」を開催し、同時に、常設展示「横浜に生きた人々の生活の歴史」を説明する英語・中国語・ハングル三か国語表記のパンフレットを作製しました。



常設展示室内の通史展示は、原始Ⅰ、原始Ⅱ、古代、中世、近世、近現代と6部屋から構成されています。パンフレットでは、それぞれの時代の概要、その部屋で扱っているテーマとその内容を、写真を交えて、英語・中国語・ハングルの順に並記する形で紹介しています。見開き4ページの簡単なものですが、通史展示を観覧する際の手引きになるものです。博物館全体の概要や展示構成、歴史劇場、ビデオコーナーなど、博物館そのものの手引きとなる三か国語のリーフレットも用意してあります。案内係に声をかけていただければ、お望みのものをお出しします。外国からのお客様と一緒に博物館を楽しむアイテムとしてご利用ください。

(2002年10月1日～2003年3月31日)

- 10月4日 歴史講座「古文書読解教室」(12月6日まで連続10回)
- 10月12日 特別展「くらしを集めるくらしを探る 屋根裏の博物館—実業家浅沢敬三が育てた民の学問—」開催(神奈川県立日本常民文化研究所との共催。11月24日まで)
- 10月24日 <ふるさと横浜探検4>戸塚周辺周辺の史跡散歩
- 11月2日 体験学習「ぞうり編み」
- 11月3日 体験学習「まゆ細工」、都筑区民まつり出店参加
- 11月9日 特別展関連公開シンポジウム「民具研究の歴史と方法—浅沢敬三の視点—」(日本民具学会との共催)
- 11月11日 特別展関連公開講座「アチックミュージアムに集う人々」(神奈川県立日本常民文化研究所との共催)
- 11月17日 野焼き
- 12月7・8日 体験学習「風づくり」
- 12月14日 平成14年度横浜市指定・登録文化財展(1月13日まで)
- 12月15日 エントランスホールコンサート「ハートフルサウンズ in れきはく」
- 12月22日 指定・登録文化財展記念講演会 水野敬三郎「甕った天平の菩薩像—龍華寺:脱活乾漆像—」
- 12月25日～27日 燻蒸のため臨時休館
- 1月12日 指定・登録文化財展記念講演会 鈴木良明「旧鎌倉郡鍛冶ヶ谷村 小岩井家文書の周辺—平成14年度指定建造物旧小岩井家住宅—」
- 1月22日 歴史講座「古代史講読講座」(2月19日まで連続5回)
- 1月25日 横溝屋敷文化財指定15周年記念企画展「江戸時代の獅子ヶ谷村—絵図・古文書で探る村と名主—」(3月9日まで)
- 1月25日・26日 体験学習「紙すき」
- 2月2日 開館8周年記念特別講演会 河合正朝「東国の水墨画」
- 2月9日 歴史講座「土器づくり教室」(3月23日まで計4回)
- 2月7日 インターンシップ(社会研修)受入れ(フェリス学院大学生2名、2月18日まで)
- 2月11日 企画展関連研究講座「横溝屋敷を語る」
- 3月22・23日 センター北まつり
- 3月23日 野焼き
- 3月27日 <ふるさと横浜探検5>山梨県立考古博物館と釈迦堂遺跡博物館の探訪

横浜市歴史博物館 ● 日誌 ●

PRSENT 読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。感想等をお寄せ下さい。お寄せ下さった方にプレゼントをさしあげます。

はがきに、①お名前②住所③年齢④このニュースを手にした場所⑤ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、博物館読者プレゼント係までお送り下さい(博物館の住所はこのページの右下)。締切りは2003年6月30日です。ご応募いただいた方の中から抽選で10名様に、博物館ミュージアムショップよりオリジナルグッズをさしあげます。

当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。



横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

編集後記

博物館では、春から夏にかけて日本の古代社会と文字に関する特別展・企画展が続き、古代の人々が出会った多様な文字資料が集まっています。文字のない生活は現在の私たちに想像もつきませんが、文字のない世界に生きる、初めて文字に出会った古代の人々はどういう思いを抱いたのでしょうか。その思いを想像しながら観覧するのを楽しみにしています。ぜひみなさまもお越し下さい。お待ちしております。

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡

月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

都筑民家園

毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上3人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

●特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

●毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

●「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

